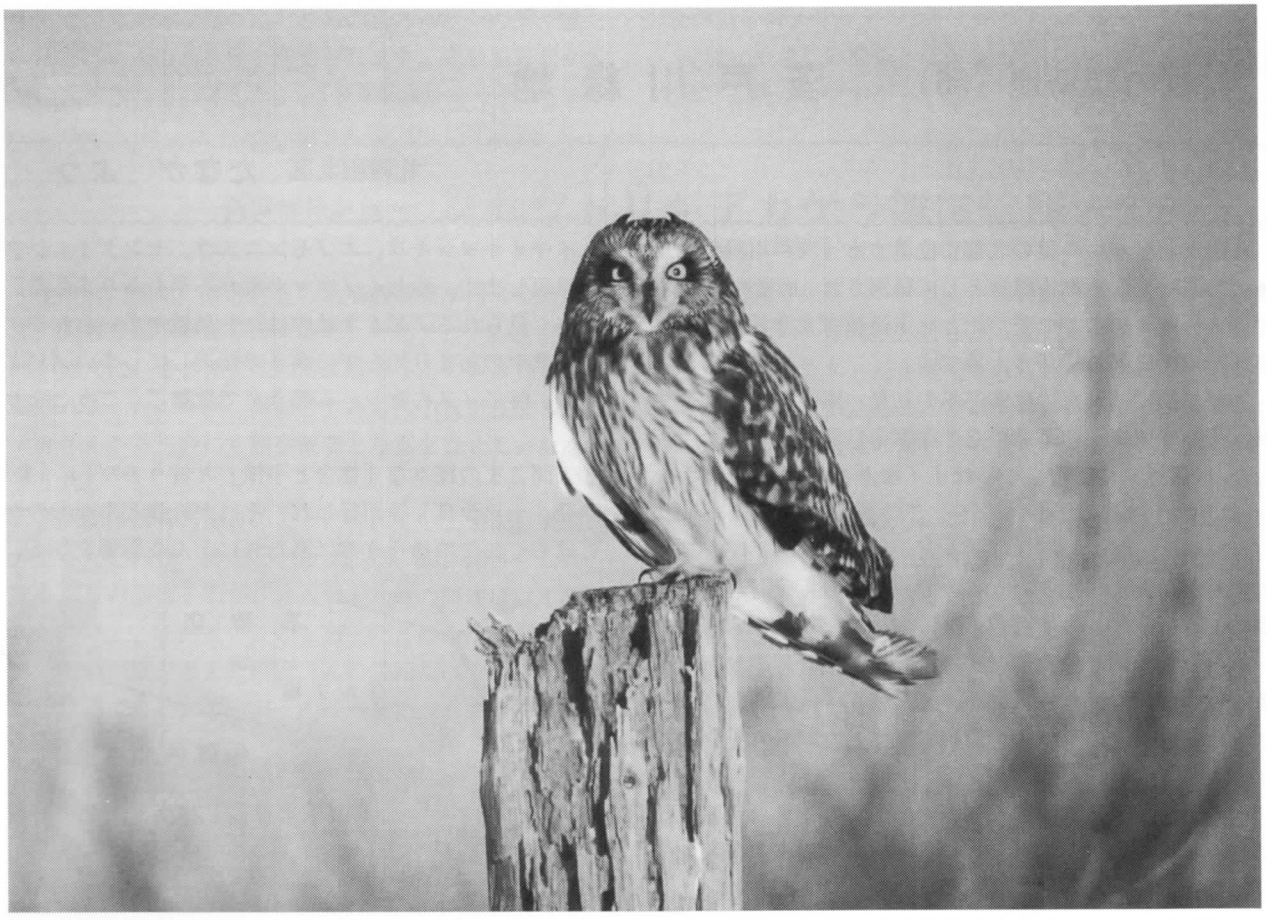
ISSN 0910−2396

野鳥だより

−北海道−

北海道野鳥だより第153号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　平成20年9月21日

コミミズク



2003. 1. 10　鵡川河口

撮影者　門村徳男（むかわ町）

もくじ

私の探鳥地（55）　茨戸川緑地
札幌市北区　たなか　よう …… 2
－新聞情報から－
コムクドリがアカゲラ雛に給餌　広　報　部 …… 3
“水と生きものの郷・トゥ・ペッ”
当別地区自然再生ワークショップ座長　辻井　達一 …… 4
夏羽のエリマキシギとの出逢い
中標津町　前沢　卓 …… 6
支笏湖の鳥　江別市　富川　徹 …… 7
鳥好きの文学散歩10　宮沢　賢治「よだかの星」
札幌市手稲区　高橋　良直 …… 12
探鳥会ほうこく …… 12
探鳥会あんない …… 16
鳥民だより …… 16

私の探鳥地（55）　茨戸川緑地

札幌市北区　たなか　よう

札幌市北区あいの里の北部に位置する「茨戸川緑地」が私の探鳥地です。都市緑地として種別され、面積約124,000平方メートルの広さで茨戸川と北海道教育大学札幌校に挟まれた場所にある緑多き土地です。

私が最初に訪れたのは2005年の初夏。附近の真勲別や生振、そして美登江の草原の鳥を探索中に偶然見つけた所でした。（偶然見つけたものにはイイ物があるが私の勝手な持論です。）当初は看板もなく、ここ数年位の間にパークゴルフ場オープンや市民植樹などが開催され散策路が造られました。都市緑地ということで札幌市の指定管理者制度等により、「あいの里公園」と、この「茨戸川緑地」を一つとみなし同じ造園業者が維持管理し、管理事務所を設置しています。今年８月に３つ目になるパークゴルフCコースもオープンとの事です。環境に配慮した開発らしいのですが…。

さて、メインであります鳥のお話に入ります。生振大橋のたもとを石狩川方向へ入りパークゴルフ場を過ぎ緑地帯となります散策路を進み、篠路町拓北の住所となり、この両側が鳥さんたちのお出まし場所となります。草原の鳥と一部の水辺の鳥たち（両側が川）が迎えてくれます。アオサギやチュウヒ、トビ、少ない頻度でオオワシ、オジロワシなど猛禽類と、冬季はキンクロハジロ、ミコアイサ、ハシビロガモ、マガモ、ヒドリガモ、たまにオオバンなども見られます。近年釣り人が多くまた開発整備等も進み、水鳥も年々減少傾向である様な感じがします。

基本的には夏の草原性（一部雑木林もあり）の探鳥となります。鳥種は、コヨシキリ、ホオアカ、ノビタキ、オオジュリン、アカゲラ、カッコウ等と、ウグイス、ツツドリ、キジバト、時々ベニマシコ。その年にもよりますが、アリスイやオオヨシキリ、エゾセンニュウ、センダイムシクイも出現します。珍しくノゴマが現れる年もありました。一番良く見られるノビタキはやはり営巣数が多いらしく、鳥見に熱中のあまり知らずに巣まで接近してしまいノビタキの親、特にメスのクレーム鳴き？で批難ごうごうとなります。

人間さまの様々な「都合と事情」と言う名の下に「整備、開発、土地改良」等が行われ、それが一体どんなものか、しばらくここに通ううちに鳥たちにどんな影響を与え、環

茨戸川緑地周辺地図

境が一変してしまうとこれだけの変化があるのだと小規模ですが、目の当たりにした様な気がします。しかし、日々ここに通う中でどこの鳥の生息地も同じだと思いますが、流石に鳥さんたちも野生動物、多少の環境変化や天候異変が起きようがたくましい彼らの繁殖・生存能力も見させて頂きました。嬉しいことに小鳥の雛たちは親と同じ姿形(当然ですが)をして今年もたくさん巣立っていきました(来年はどうなりますか、はてさて)。人の子も鳥の雛も動物の子供はすべて比類なき可愛さ。これはいつも実感しています。

また、愛護会の幹事の中のお一人の話では、数年前ここで植樹祭等の計画があり、同幹事に環境アセスメントの調査などで環境や生物などへの影響に関し意見を求めてきた経緯があったそうです。その前段として繁殖時期に草刈り作業などがあったようです。その幹事も仰っていましたが、おそらく同時期の草原のたくさんの鳥さんたちの巣や雛たちが犠牲になっただろうと推測されます。先日も草刈が広範囲に実施されていました。(3日前間違いなくそこにあったノビタキの巣はどうなったのだろう?)

わたしもホモサピエンスの一人として、過去の様々な開発や経済の高度成長に加担してきた事に(是非は別としても)対して反省しきりです。地球温暖化、環境問題、化石燃料枯渇とエネルギーなどなど問題は山積の時代をいかに乗り切るのか否か、実に不透明です。アメリカ元副大統領のA・ゴア氏は著書「不都合な真実」の中で「今地球上で起っていることを真摯に捉え共に英知を集め行動しましょう」と。また、先人は言いました、「過去は変えられないが、未来は変える事ができる」と。私たちにはいったい何が出来るのか、何をしなければならないのかを真剣に考えるところまで来ていると思う今日この頃ですが…。

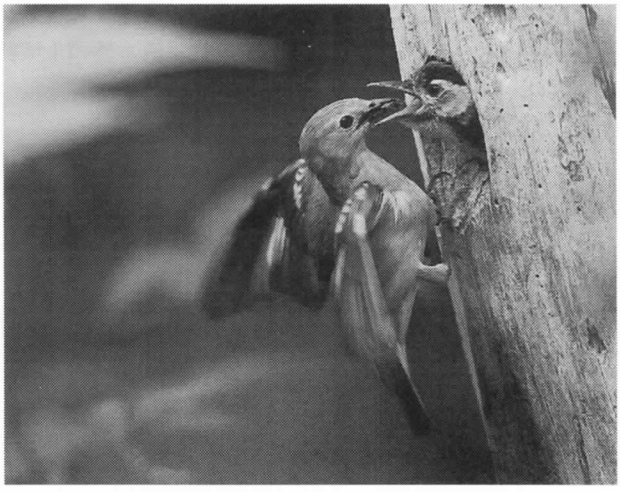
やはりこの緑地も、愛護会の探鳥地の一つである「東米里」と同じ轍を踏むのかも知れません。来年もまた、いつもの鳥たちが来てくれるでしょうか。ぜひ来てください!(私の独り言)

環境にやさしい開発とは何なんでしょう? 開発は開発では?と思うのですが…。

—新聞情報から— コムクドリがアカゲラ雛に給餌

今年(2008年)6月19日の北海道新聞夕刊(全道版)に、大沼公園(渡島管内七飯町)の林で、コムクドリの雌が巣穴にいるアカゲラの雛に餌を与えている光景が掲載されました。今回、撮影者である苫小牧市在住の井上大介さんから当会にも観察概要と写真を寄せていただきました。

新聞記事は6月16日のことに触れていますが、実際に井上さんが観察・撮影したのは、15、16、18日でした。アカゲラの雛は1羽で、コムクドリ雌の餌運びは1時間に10回以上、20回近いこともあったとのことです。一方、アカゲラが餌を運んだのはほんの数回だけで、そのアカゲラは雄でした。アカゲラの雌、またコムクドリの雄の姿は巣の遠くにちらりと見えたものの、それぞれが番いの片方かどうかは判然としなかったそうです。後日、アカゲラ雛は巣立ちしたと推定されること、また、当該巣穴から数十m離れたところでは別のコムクドリが子育て中で、そちらは通常の繁殖だったことも井上さんからお聞きしました。



大沼公園 2008. 6.18 井上大介さん撮影

別種間での給餌は珍しいことと思われますが、10年前の北海道新聞(1998.7.23)には、十勝管内芽室町でのほぼ同じ事例が掲載されています。時期は6月上旬で、こちらはアカゲラの雛は2羽で、コムクドリ雌による給餌は20分おきだったのに対し、アカゲラ(こちらは雌)は1時間に1回ぐらいだったとのことです。また、雛のうちの1羽が巣立った後、アカゲラ雌は来なくなってしまったけれども、コムクドリは残った1羽に餌を運び続けたとも書かれています。

上記2例とも、餌運び頻度を考慮すると、コムクドリ雌が自分自身の繁殖もしていた可能性は低いと思われます。それとは別に、実親とみなされるアカゲラ自身の餌運び頻度が低いのも何か理由がありそうです。

本能的行動、この場合、おそらく雛の鳴き声などによって引き起こされた給餌行動は、託卵された鳥が実の子でない雛に餌を与えるように、他種の雛に対しても起こるのは決して特異的なことではありません。でも、そこに至るまでには、事例によって様々な要因があると思われます。

広 報 部

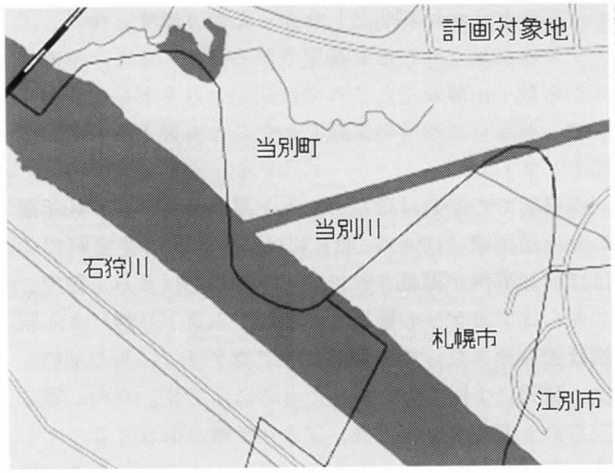
“水と生きものの郷・トゥ・ペッ”

当別地区自然再生ワークショップ座長 辻 井 達 一

北海道開発局は石狩川・当別川合流点周辺（下図参照）で、沼、湿地、河畔林を人工的に造り、かつての自然を再生する事業を2008年度から始めました。事業は「石狩川下流当別地区自然再生事業」と名付けられ、具体的な計画については、環境関係のNPO法人代表者や自治体関係者による「当別地区自然再生ワークショップ」で話し合いがなされてきました。

当該地区には数年前に石狩川浚渫工事に伴う排泥地が造られ、その跡地である沼や湿地ではカモ類やシギ・チドリ類などの水鳥が観察されていました。また、周囲では草原の鳥たちも見られてきました。自然再生事業により、さらに多くの鳥たちが飛来・生息するようになることが期待されます。

この事業実施にあたり、ワークショップ座長の辻井達一氏（北海道環境財団理事長）にご寄稿いただきましたので紹介します。（広報部）



石狩川下流当別地区自然再生実施計画対象地地図

水と生きものの郷・トゥ・ペッ

トゥ・ペッは言うまでもなく当別町の古名で、これはもっと正確にはアイヌ語名のトゥ・ペッ・プトから来たらしい。キャッチコピーとしては少し歯切れ良く、と考えてこういう形に仕立てた。「沼から来る川」という意味だそうだが、ではその沼とはどれを指すのだろう。地図ではどうもそれらしいのが見当たらない。あるいはもう干拓されてしまったのかも知れない。篠津原野と呼ばれた一帯は沼だらけだったらしいから、それらを指していると思える。

その頃、ここは正に水と生きものたちの郷だったことだろう。いわゆる開拓が始められた初めの頃ももちろん、まだそこは人間を除く生き物たちの世界だったものと思われる。その生き物たちの世界は十分な水の存在によって支えられていたはずだ。それらはつまり水の世界の生き物たちだった。

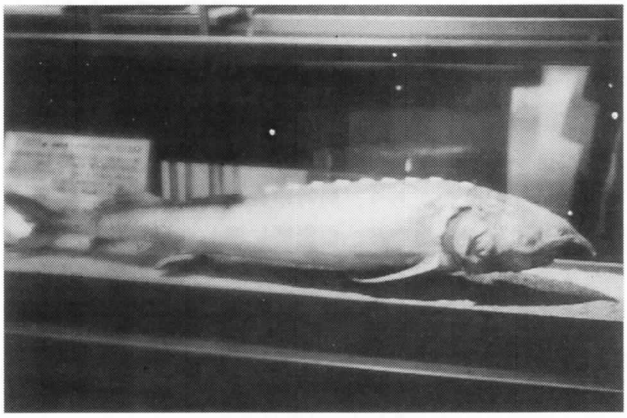


写真１　チョウザメ（石狩市保存標本）

でも、今はそれこそトゥ・ペッの全てが水たっぷりの世界ではない。生き物たちにとってはそこは必ずしも“水の世界”でもなさそうだ。彼らの元々の世界、“水の郷”を再現してみようではないか、というのがこの計画の背景である。

計画は各種団体が参画して設けられた５回のワークショップ（平成19年３月～20年３月）で検討された。

そこに何が？

では、そのトゥ・ペッ・プトには一帯、何があったのだろうか？そこはどんなところだったのだろうか？

石狩川もまだ、このあたりは感潮域であるから塩分が混じっている。したがって河岸の干潟には汽水性の土壌動物

写真２　チュウヒ

写真3　ハンノキーヨシ群落

や貝類なども生息している。それをめがけての水鳥も多く集まってくるところだったはずだ。

魚たちにしてもそうで、ウグイ、サケ、サクラマス、ボラが見られただろう。大物としてはミカドチョウザメの姿もあったに違いない。これは大正年間までは石狩河口にロシア人たちが集落を設けていてチョウザメを獲っていたというし、石狩市の祠にはチョウザメを祀ったものがあり、標本は石狩市庁舎内にも保存されている。

河畔の草原にはもちろん草原性の野鳥が群れる。繁殖するものもあれば通過するものもあり、そしてそこを狩りの場としている猛禽類もある。さまざまな鳥たちのフィールドなのだ。現在、チュウヒの飛翔がよくみられるところとして知られていて、そのフィールド条件が維持されることが望ましいとされている。

けれども、草原というのは北海道の気候環境ではいつまでも草原であり続けることはあり得ない。石狩平野の場合は、まずヤナギ類が出てきて、それにハルニレ、ケヤマハンノキ、少し湿った河畔ではハンノキが出てくる。多分、それにエゾニワトコ、ノリウツギなどが加わることだろう。今、私たちもここトゥ・ペッにそれを見ている。

プランとターゲット

当別川はしばしば流路を変えていた。ことにそれが石狩川と合流する部分については、石狩川が多くの土砂を堆積させることもあって河口の位置が変わり、それに伴っての流路の変化が大きかったようである。合流点一帯には土砂が溜まり、大小の水溜まりの点在する洲の様相を呈していたものと思われる。

そもそも石狩川の名前の元になったアイヌ語の“イ・シカラ・ペッ”は「それを・回流する・川」を意味すると言う。つまり曲がりくねった川である。そこには各所に沼や池があり、ほとんどが泥炭の堆積する湿地であった。往時の地形図にそれはよく表れている。

地形はともかく、景観を再現しようにも大昔の写真などありはしないが、植物の調査はずいぶん以前から行われて

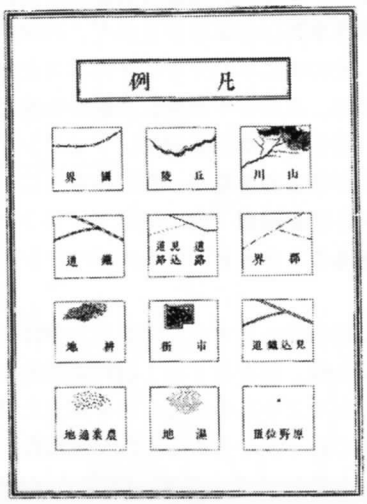


図1　明治時代の地図

いた。たとえば篠津原野、幌向原野、対雁原野などの調査報告があるし、鳥類にしても石狩河口から始めて中流域まで、そして宮島沼などのデータがある。魚類については江別など漁協の資料が得られる。

自然の再現と言うのは難しいが、形態の限りなく近いものの再現と、機能の再生は可能とみてよい。かなり以前からミチゲーションという言葉が使われるようになっているが、この“トゥ・ペッ”もその一つだと考えて良い。

次は使い方と管理だが、なにしろ石狩湿原の原型をモデルにしようとするのだから、できるだけ自然を撹乱しないような使い方が望ましい。しかし、自然はそれ自体、推移

するものだから、その制御はどうしても必要だ。誰が、どのようにするのか、という管理システムとプログラムが考えられなければならない。

この計画の実施にあたっては、「石狩川下流自然再生検討会」ならびに「石狩川下流河岸検討会」(石狩川開発建設部)の助言・協力を得るものとしている。優れた「水の郷」が生まれることを期待したい。

図2　完成予想図

夏羽のエリマキシギとの出逢い

中標津町　前　沢　　卓

今年5月1日、フェーン現象で真夏のように暑い野付半島の干潟はトウネン、キョウジョシギ、ハマシギたちで賑わっていた。その中にエリマキシギのメスと思われる1羽を観察。次の日、このシギの横に、頭から首にかけて光沢のある、深い緑色の羽が印象的で、アイリングの目立つ美しいシギ1羽が居るのを見た。数日後さらに、模様や色彩が異なるシギ5羽を観察(内1羽はアイリングあり)。首に飾り羽があることから6羽ともエリマキシギのオスと確信した。

ほぼ完全な夏羽のエリマキシギを見たのは初めてで、白や黒、深緑から橙、茶など1羽1羽の個性的な色彩と模様は、他のどのシギよりもその美しさを際立たせていた。中でも濃い紫色の飾り羽をもつ1羽は、高貴な雰囲気を漂わせ、1枚1枚の飾り羽がベルベットのようにしっとり輝いていたのが今でも目に焼きついている。

貴重な出逢いを与えてくれたエリマキシギたちは、後に到着したアカアシシギにエサ場で追われながらも、争いを避けるように静かにエサを捕り、5月末には次の地へと旅立っていった。

[編集部注] 写真は6月1日の北海道新聞朝刊(全道版)に掲載されたものと同じです。エリマキシギは春秋に旅鳥として日本を通過しますが、「襟巻き」が発達した複数のオスが観察・撮影されたことは全国的にも初めてに近いものと思われます。カラー写真で掲載できないのが残念ですが、撮影者の前沢さんに観察記録と合わせてご寄稿いただきました。

頭部、襟巻きとも白い個体(2008. 5.18)

頭部が茶色で、襟巻きが黒い個体(2008. 5.18)

支 笏 湖 の 鳥

江別市 富 川 徹

はじめに

昨年、支笏湖の水とチップの会（以下「チップの会」という）から「支笏湖の人と自然」という本が刊行されました。私も恥ずかしながら会員の一人として「支笏湖の鳥類」を担当したので、その一端を報告したいと思います。

この会は、支笏湖のヒメマス（チップ）の減少を契機に、本種の生息する支笏湖の自然環境について、いろいろな分野からメスを入れて行こうと、1988年（昭和63年）に設立されました。会員有志らの想いある活動の成果を会誌「かぱ・ちぇぷ」にまとめてきましたが、それをもとにして支笏湖の自然環境を網羅する内容の本を作ろうと完成したのが本書です。

支笏湖には、札幌から車を走らせばそれほど遠くはないのですが、なぜかバードウォッチャーの多いところには思われません。今でも変わらずで、「なぜなのだろう？」と思ってしまいます。ですから、これまで支笏湖の鳥類に関わる資料は少なく、実際に、我が会の野鳥だより第99号にある元会長柳澤信雄氏の書かれた「支笏湖国民休暇村周辺1994年４月の探鳥記録」や、数件の関係資料があるほかでは、一部のガイドブック、パンフレット類があるにすぎないのです。

私が鳥を見だして10年を過ぎたころになりますが、チップの会に入るとほぼ同時に、趣味の登山を兼ねて支笏湖周辺にも足を運ぶようになりました。ここではその時の1987年～1989年、1991年の記録と、再び2003年～2005年に調査した記録を加えた７年間（49日分）の記録をまとめ、鳥類リストとして作成しました（補完的に既存資料等も整理）。

ここでは、「支笏湖の人と自然」の概要版的にはなりますが、支笏湖の鳥の生息状況などについて簡単にふれたいと思います。支笏湖の鳥見の参考になれば幸いです。

1 支笏湖について

42000～30000年前、支笏火山が噴火を繰り返すことによってカルデラを形成してできた支笏湖は、面積77.3㎢、周囲約12㎞の国内最大級のカルデラ湖です。恵庭岳（1320m）、風不死岳（1103m）、及び樽前山（1024m）などの山々に囲まれた雄大な自然景観を備え、1949年（昭和24年）には洞爺湖の周辺地域をも含めて「支笏洞爺国立公園」の指定を受けました。

支笏湖の原始的な自然は、ヒグマやエゾシカなどの大型

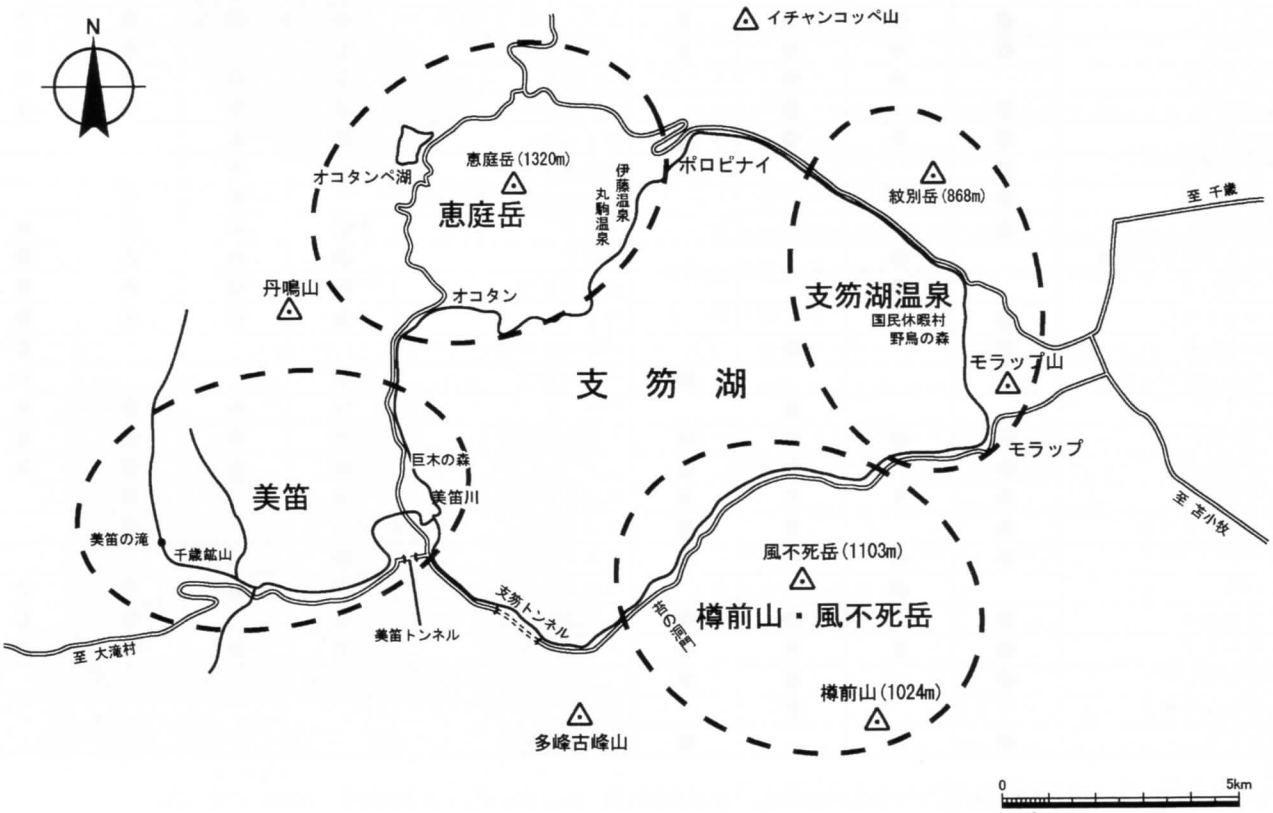


図１ 支笏湖とその周辺地域、観察地域

表1　支笏湖の鳥類

種　名	地域				種　名	地域			
	支笏湖温泉	樽前山・風不死岳	美笛	恵庭岳		支笏湖温泉	樽前山・風不死岳	美笛	恵庭岳
カイツブリ	●				ヒヨドリ	●	●	●	●
ハジロカイツブリ			●		モズ	●			●
ミミカイツブリ		●	●		カワガラス	●		●	
アカエリカイツブリ		●			ミソサザイ	●	●	●	●
ウミウ	●		●	●	カヤクグリ	●	●		
アオサギ	●		●	●	コマドリ			●	●
オオハクチョウ			●		ノゴマ				●
マガモ	●		●	●	コルリ	●	●	●	●
コガモ	●				ルリビタキ		●	●	●
ヒドリガモ	●				ノビタキ			●	
オナガガモ	●				トラツグミ	●	●	●	●
キンクロハジロ	●	●	●	●	マミジロ			●	
スズガモ	●		●	●	クロツグミ	●	●	●	●
シノリガモ※			●		アカハラ	●	●	●	●
ホオジロガモ			●	●	シロハラ			●	
カワアイサ	●		●	●	マミチャジナイ	●			
ミサゴ※			●		ツグミ	●	●	●	●
ハチクマ※	●				ヤブサメ	●	●	●	●
トビ	●	●	●	●	ウグイス	●	●	●	●
オジロワシ※	●		●		エゾセンニュウ	●		●	
オオタカ※	●	●		●	メボソムシクイ	●		●	●
ツミ		●			エゾムシクイ	●	●	●	●
ハイタカ※	●	●	●	●	センダイムシクイ	●	●	●	●
ノスリ	●	●	●	●	キクイタダキ		●	●	●
ハヤブサ※	●	●		●	キビタキ	●	●	●	●
エゾライチョウ※	●	●	●	●	オオルリ	●	●	●	●
イソシギ	●		●		コサメビタキ	●		●	●
ヤマシギ	●		●		エナガ	●	●	●	●
アオシギ			●		ハシブトガラ	●	●	●	●
オオセグロカモメ	●			●	ヒガラ	●	●	●	●
ウミネコ				●	ヤマガラ	●	●	●	●
キジバト	●	●	●	●	シジュウカラ	●	●	●	●
アオバト	●	●	●	●	ゴジュウカラ	●	●	●	●
ジュウイチ		●	●		キバシリ	●	●	●	●
カッコウ	●		●		メジロ	●	●	●	●
ツツドリ	●	●	●	●	ホオジロ	●	●		
アオバズク	●			●	カシラダカ		●		
フクロウ※	●				ミヤマホオジロ		●	●	
ヨタカ※	●				アオジ	●	●	●	●
ハリオアマツバメ※		●			クロジ	●	●	●	●
アマツバメ		●			カワラヒワ	●	●	●	●
ヤマセミ※	●				マヒワ	●	●	●	●
カワセミ※	●		●		ハギマシコ※				●
アカショウビン※				●	ベニマシコ	●			●
アリスイ			●		ウソ	●	●	●	●
ヤマゲラ	●	●	●	●	イカル	●	●	●	●
クマゲラ※	●		●	●	シメ	●	●	●	●
アカゲラ	●	●	●	●	ニュウナイスズメ	●		●	
オオアカゲラ※	●		●	●	スズメ			●	
コゲラ	●	●	●	●	コムクドリ	●			
ヒバリ		●			カケス	●	●	●	●
イワツバメ	●		●	●	ハシボソガラス	●		●	●
キセキレイ	●	●	●	●	ハシブトガラス	●	●	●	●
ハクセキレイ	●		●	●	合　計	81	58	80	69
セグロセキレイ			●			15目　37科　109種			
ビンズイ	●	●		●					

(注)

1．鳥類の目・科・種・亜種（和名）・学名及び配列は、「日本鳥類目録　改訂第6版」（日本鳥学会　2000）に従った。

2．※が付いたものは「希少種」（文化庁の天然記念物、並びに環境省などの絶滅のおそれのある種等に選定されている種）である。

哺乳類をはじめとする鳥獣類の生息において恵まれた環境を有しており、湖とその一帯は鳥獣保護区（道設）にもなっています。そうしたことから、国立公園の利用目的にも配慮して野鳥の森やビジターセンターなど、野鳥観察や自然観察の自然探勝に重視した施設整備も進められています。

支笏湖には古くから温泉もあり、くつろぎや癒しを求めた温泉利用も多いという一方で、登山や釣りを楽しむアウトドア派の多いというのも地域の特徴にあげられます。もとより、自然景観と自然環境に極めて恵まれた道内有数の観光地になっています。

2　支笏湖の鳥類相

対象の範囲は、支笏湖とその周辺地域で、便宜的に(1)支笏湖温泉、(2)樽前山・風不死岳、(3)美笛、(4)恵庭岳の４つの地域に区分して整理を行いました（図１）。

その結果、支笏湖の確認鳥種の記録は、15目37科109種でした（表１）。

これを分類すると、目別種数ではスズメ目、カモ目、タカ目が、また科別種数ではツグミ科、カモ科、タカ科、ウグイス科、アトリ科、キツツキ科などが（図２）それぞれ順に多く記録されました。なお、ここでは示しませんが、

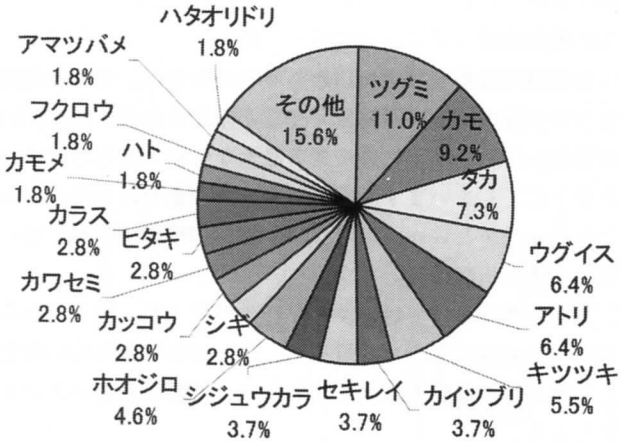


図２　科別種数

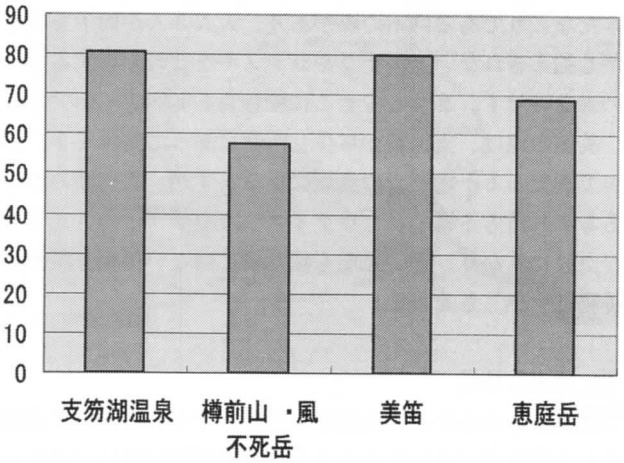


図３　地域別確認種数

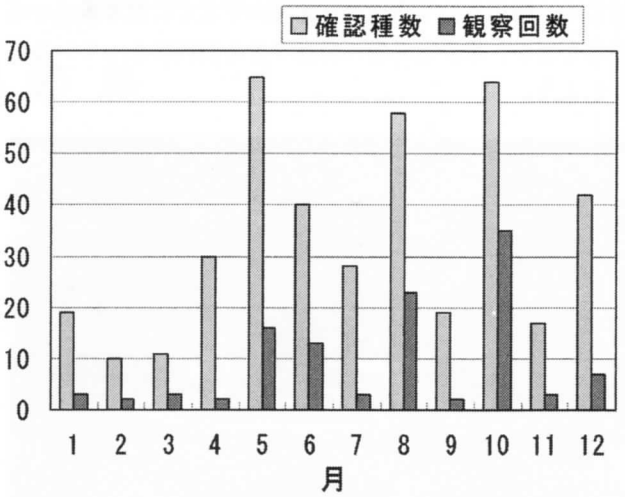


図４　月別種数

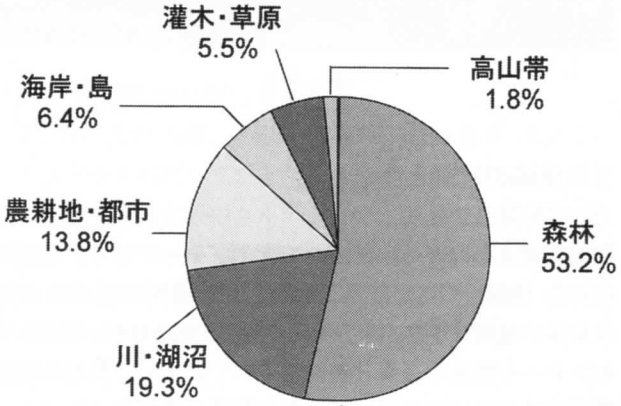


図５　生息区分

既存資料から得た記録を加えて整理すると合計で155種になります。

地域別では、58種～81種が記録されてはいますが、概観するうえで種構成や確認状況においてとくに地域差は見られてはいません（図３）。

月別では観察の頻度に差があるものの、春から秋にかけて確認種数が多くみられるという傾向のあることが分かりました（図４）。

次に、渡りの習性区分では夏鳥、留鳥、冬鳥、旅鳥の順に多く、環境の生息区分では、森林、川・湖沼、農耕地・都市など（図５）の順に多い結果を得ました。これは恵まれた自然環境を有する北海道の一般的傾向と一致するものですが、支笏湖はそれらを凝縮した地域性をもち、あわせてより自然の豊かさ（原始性）を象徴する出現傾向であることをうかがわせます。

希少種についてみれば、シノリガモ、ミサゴ、ハチクマ、オジロワシ、オオタカ、ハイタカ、ハヤブサ、エゾライチョウ、フクロウ、ヨタカ、ハリオアマツバメ、ヤマセミ、カワセミ、アカショウビン、クマゲラ、オオアカゲラ、ハギマシコの合計17種がリストアップされました（表１参照）。

このように、支笏湖周辺の針広混交林の広大な森林帯を

はじめ、湖沼という水辺から亜高山帯までに至る多様な環境の存在が、希少な鳥類の生息できる要因になっているのでしょう。

ヤマセミ

3　地域の特徴と生息状況

(1) 支笏湖温泉地域

支笏湖温泉街から、南側のモラップキャンプ場、北側の紋別岳（866m）に至る周辺地域で、支笏湖を訪れる人の最も多い地域です。ホテルや土産品店があるほか、ビジターセンターや野鳥の森などが整備されています。鳥類の確認種は81種で地域の中では最も多く記録しました。

初夏、野鳥の森に一歩足を踏み入れると、アカゲラやコゲラなどのキツツキ類やヤブサメ、ウグイスなどの森林性鳥類が目立つようにその存在感が伝わってきます。昔、国民宿舎前の広場のハリギリでクマゲラが営巣しましたが、ここでは本種に会えることはとりわけ珍しくはありません。また、湖畔から千歳川の静まりかえる川岸の小枝でヤマセミ、カワセミが休息し、あわよくば採餌のダイビング行動を目にすることもあります。夕方ともなればクロツグミやアカハラが、日が暮れるとフクロウやアオバズク、ヨタカが鳴きはじめます。

ここには野鳥の森があり、アプローチも容易なことから初心者を問わず一年を通してウォッチングを楽しめるお薦めの地域です。

(2) 樽前山・風不死岳地域

樽前山から風不死岳の亜高山帯、そして東側の沢である苔の洞門辺りの地域で58種が確認されました。全体としては思ったほど森林性の鳥は出現しませんでしたが、夏季においてはハリオアマツバメやアマツバメの乱舞、秋季にはノスリ、ツミのタカ柱やハチクマの飛翔移動など、そして、おびただしい数のシジュウカラやヒガラの南下の大移動を間近に体感できる地域です。ここは多くの鳥たちの渡りの通過地点となっているのです。

苔の洞門は、涸沢で風のあたらない特殊な環境にあって、小鳥たちの休息や隠れ場となっているようです。ある時、そんなひっそりとした環境の中で森林性のジュウイチが枝に止まっていながらも、どうして土中のミミズの存在が分かるのか、繰り返し採食する不思議な一面を観察できました。ここは何かを秘めた魅力ある地域です。

風不死岳と樽前山

(3) 美笛地域

支笏湖に注ぐ美笛川河口からオコタン地区、それに西側となる美笛の滝の周辺地域で80種が確認されました。河口付近にいると、足下に迫る湖と雄大な景色・美しさについ声を上げてしまいます。もちろん、カモ類をはじめカワセミやアオサギといった水鳥の姿もそれらの景観の一部になっているのは当然のことです。

秋から冬にかけては、マガモ、カワアイサ、キンクロハジロ、シノリガモなどが飛来し、とくに冬季凍らない湖として水鳥類の移動中継地を担うという役割は大きいといえましょう。

河口から少し北側に行くと美笛キャンプ場があります。ここには江戸から明治にかけて御料の森として保護されてきたなごりである巨木の森があり、大人３人が両手を広げても抱えきれないミズナラやシナノキなどの生育する原生の森なのです。まさしくそこに棲む鳥を実感できるのです。

美笛の滝は、支笏湖から少し西側にあって離れます。かつて歴史ある千歳鉱山の奥地になりますが、支笏湖の源である流れ落ちる滝の音とウグイス、ミソサザイのさえずりが奇妙に重なり、どことなく他地域にはない様相を漂わせ神秘性を感じさせます。

(4) 恵庭岳地域

恵庭岳を中心に、東山麓のポロピナイから南西の伊藤温泉と丸駒温泉、そしてオコタンペ湖の周辺の地域で69種が確認されました。恵庭岳の頂上付近は岩盤崩壊で今でもア

プローチできないのですが、その急峻な地形がもたらすように麓に広がる豊かな針広混交林には森林性鳥類が多いのです。なかでもクマゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、コゲラのキツツキ類が勢揃いであることには驚かされます。また、山麓には薄暗い沢地もあって、87年、88年には確認したアカショウビンが、「キョロロロロー」と尻下がりに震えた声を、今にでも響かせてくれる様相を呈します。

美笛川河口

一方、恵庭岳の西側にはエメラルドグリーンまたはコバルトブルーの湖面のオコタンペ湖があります。ここの森林一帯は漁岳森林生態系保護地域となっています。湖面にはウミウ、アオサギ、マガモなどの水鳥が飛来しますが、森林部ではウグイスをはじめ、キツツキ類、カラ類も多数確認できます。展望台からの眺望はすばらしく、上空を見上げればノスリが旋回飛翔し、ちょっと時間をかければ珍しい猛禽類が期待できるスポットです。

4　おわりに

支笏湖といっても、湖の大きさや規模、周辺の森林などをすぐにイメージできる人は少ないと思います。国内最大級のカルデラ湖、面積は北海道で三番目、体積では一番目。そして、最深363mで冬でも凍らない湖。さらに、恵庭岳、風不死岳、樽前山など千メートルを超える山々（外輪山）に囲まれる、湖面標高248mから恵庭岳山頂1320mまでの標高差ある地形を有します。

私も、まさしくそれらを意識しつつチップの会などで足を運ぶほどに、我々が普段生活している空間（生活環境）にはほど遠い空間（自然環境）の存在に気づかされ、いっそう鳥類相にこだわってきた感があります。

支笏湖は海に面しない内陸地ですが、何より湖沼に起伏と高低差ある地形、豊かな自然環境があります。だからこそ、鳥類も支笏湖だけにしか見られないという特別な種類もいると思いがちになりますが、鳥類相全体としてみればそうとは限らず、比較的道内のどこにでもいるような種類が結果として得られたのかも知れません。今回の鳥の記録については、調査の対象が広いことに加え、調査の方法等も一様ではなかったことなどが課題としては残りますが、各々の地域の出現状況や特徴から、今は見えない何かが伝わってくるような記録は得られたと自負します。

春季におけるツグミ類、ウグイス類、ヒタキ類、カラ類、ホオジロ類などの森林性鳥類の大コーラス、クマゲラをはじめとするキツツキ類のダイナミクなドラミングは支笏湖の醍醐味ともいえましょう。また、秋季から冬季のワシタカ類やカモ類などの渡り大移動の重要地域、及びエゾライチョウ、アカショウビンなどの好む豊かな森や水辺の存在保持など、多々目に余るものがあります。

エゾライチョウ

これからの支笏湖は、自然や原始性に加えて「静寂」もキーワードとなります。自然保護が叫ばれる現代、都会周辺のウォッチングとはかけ離れた大自然の中で、新しい発見や出会いに期待をふくらませ、未知の奥深さを秘める魅力にせまってはいかがでしょうか。ぜひ、最高のフィールドをご堪能ください。

付　記

本誌をまとめるに際し、観察位置図を作成いただいた森田剛史氏、並びにヤマセミの写真を提供していただいた芹澤裕二氏に対して、この場をお借りしあらためてお礼申し上げます。

資　料

富川　徹（2007）支笏湖の鳥類，支笏湖の人と自然，支笏湖の水とチップの会

富川　徹（1992）支笏湖における野鳥観察記録，かぱっ・ちぇぷ，4，5－7，支笏湖の水とチップの会

藤巻裕蔵（2000）北海道鳥類目録,改訂２版,83pp.帯広畜産大学野生生物管理学研究室

鳥好きの文学散歩10　宮沢　賢治「よだかの星」

札幌市手稲区　高　橋　良　直

この「文学散歩」は、「野鳥だより」の紙面に余白ができることを避けるというほどの意図で時々書き散らしてきたものであるが、そろそろネタが尽きたので、今回で終わりにしたい。最後に取り上げたいのは、宮沢賢治の「よだかの星」である。

人間や社会を描くことを主眼とする近代の文学においては、動物や鳥が登場する余地は少ないが、童話の世界では動物たちは生き生きと主役を演じ、人間とも自由に交歓する。宮沢賢治の童話群では、動物はもちろんだが、鳥が主役となり、あるいは重要な役割を果たしているものが多い。「よだかの星」のほか「二十六夜」(フクロウ)、「雁の童子」(ガン)、「セロ弾きのゴーシュ」(カッコウ)などである。国松俊秀氏によると賢治の童話・短編・劇に登場する鳥は55種に上るそうで、鳥に対して大変深い関心と親しみを持っていたようである。

「よだかの星」は次のような書き出しで始まる。「よだかは、実にみにくい鳥です。／顔は、ところどころ、味噌をつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。」ヨタカは姿の醜さゆえにほかの鳥からさげすまれ、いじめられ、似た名前のタカからは理不尽に改名を迫られる。生きた虫を食べなければならないことに罪の意識を抱いていたヨタカは、空のかなたに飛び去ってしまうことを決心し、兄弟のカワセミと蜂雀(ハチドリ)に別れを告げる。ヨタカは太陽やいくつかの星座にそばにおいてくれと頼むが、みんなに断られ、やがて燃え尽きて星になるのである。

読んでみるとヨタカの姿や習性が大変よく書かれていることに感心してしまう。姿を見ることが難しい鳥であるが、賢治がこれを書いた大正時代は、今日のように野鳥の図鑑などが普及していたわけではないから、ヨタカの描写は賢治自身の観察経験に基づくものなのであろう。お世辞にも美しいとはいえないヨタカだが、この鳥を主人公に選んだ賢治に、貧しいもの、虐げられたものへの共感や博愛の情を見出すことができるだろう。

ところで、作中でカワセミと蜂雀(ハチドリ)がヨタカの兄弟として紹介されている。互いに近縁にあるとも思えず、奇異な感じを受けていたが、当時の鳥類分類ではこれら3種の鳥はいずれも「ブッポウソウ目」に分類されていたそうだ。単なる思いつきではなく、童話といえども科学的な裏付けをおろそかにしない精神を貫いていたといえるだろう。これらの鳥が当時の分類において「ブッポウソウ目」に入っていたことについては、本会会員の武沢和義さんが、本紙「野鳥だより」143号(2006年3月発行)の随想「ヨタカ、カワセミ、ハチドリは兄弟か」の中で触れておられる。

筆者は、岩手県花巻市にある宮沢賢治記念館に一度行ったことがあるが、ある彫刻家による彫刻碑「よだかの星」が入口付近に設置されていた。高さ2メートルを超える板状の石彫で、天空で昇天し、星となる瞬間のヨタカを描いたものである。記念館は、花巻市郊外の静かな森の中にあり、展示の内容は、賢治の活動の多彩さを反映して、たいへん豊富なものであった。

なお、ヨタカについては、本会が毎年実施している平和の滝での探鳥会では、平成14年までは毎年その鳴き声が確認されていたが、それ以降は平成18年に1度観察されているにとどまる。キョッキョッというあの独特の声が聞かれなくなっていることは、大変残念なことである。

(国松俊秀『宮沢賢治　鳥の世界』(小学館、1996年)を参考にしました。)

千　歳　川

2008. 5.18

札幌市清田区

竹内ゆきみ(中学1年)

あの日は、天候にも恵まれ、最高の探鳥会日和でした。私は、あまり鳥を観察した事が無かったので、この日を楽しみにしていました。出発して、最初に見つけたのはイカルでした。くちばしが黄色くて、キーコ、キーコと鳴く鳥だと父が教えてくれました。そのほかにもいろんな種類の鳥たちを見ました。でも、私が一番印象に残ったのは、オオルリという鳥でした。今まで見たことないあざやかな色にほれぼれとしてしまいました。世の中にこんなにきれいな鳥がいたんだなぁ･･･と感動しました。こういう鳥たちが見られるのは自然があるからなんだと思います。千歳川流域に来て本当に良かったと思いました。またこのような機会があったらぜひ参加したいと思います。

【記録された鳥】トビ、オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、アオバト、ツツドリ、ヤマセミ、アカゲラ、コゲラ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、コルリ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、サメビタキ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒ

ワ、ベニマシコ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上　46種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、石田典也、板田孝弘、井上公雄、今村三枝子、牛込直人、川東保憲・知子、栗林宏三、蔵前　徹、後藤義民、佐々木英之・玲子、ささきなな、さとうるう、さとうりむ、品川睦生、白澤昌彦、高橋利道、高橋良直、竹内　強、竹内ゆきみ、竹田芳範、田中　洋・雅子、田中哲郎・洋子、辻　雅司・方子、徳田恵美、戸津髙保・以知子、中正憲佶、成澤里美、蓮井　肇、畑　正輔、濱野由美子、原　美保、樋口孝城・陽子、福田恵子、真壁スズ子、マーク ホロ・ウェイ、松原寛直・敏子、南　貴和子、村木敬太郎、山田良造、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、渡辺吉宗・好子　以上　54名

【担当幹事】栗林宏三、白澤昌彦

鵡川河口

2008. 5.25

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ミサゴ、カルガモ、キンクロハジロ、スズガモ、クロガモ、キジ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、カッコウ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、コヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト　以上　23種

【参加者】赤沼礼子、板田孝弘、小山内恵子、門村徳男、岸谷美恵子、後藤義民、佐藤敦子、佐藤夕子、品川睦生、田中哲郎・洋子、田中静子、徳田恵美、濱野由美子、原美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、山本和昭、山本昌子、吉中宏太郎・久子　以上　22名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

植苗ウトナイ

2008. 6. 1

札幌市東区　**蔵前　　徹**

平成20年１月の小樽港探鳥会から北海道野鳥愛護会のお仲間に入れていただいた、初心者です。会員の皆様今後ともどうぞよろしくご指導をお願いいたします。

６月１日の植苗での探鳥会は前日からの雨模様で低気圧の接近の天気予報もあり、どうしようかとためらいましたが、小雨の中、意を決して出かけました。集合場所の植苗駅には見慣れた愛護会の会員の皆様の他、自然観察グループの方々も集まっていらっしゃいました。雨の降り方もひどくなる傾向はないようなので、幹事の方々が相談され決行する事になりました。

といっても結構な雨でしたので、傘をさす方がほとんどで合羽など着て薄ら寒い中を出発しました。出発して間もなく、電線に止まっているアオジを見つけました。雑木林を歩いていくと、カッコウやツツドリの声が聞こえ、かすかなヤブサメの秋の虫のような声やセンダイムシクイの菊千代ぎみーの声と姿も認めました。どんどん進んでいくとウグイスの声がほんのすぐ近くで聞こえ、姿はなかなか見せてはくれませんでしたが、先輩の会員のお蔭で茶褐色の体にお腹が白く、周りの緑の色を映して図鑑などで茶色とばかりの印象があった鳥がきれいに見えて感激でした。

雑木林を過ぎると草原になり、そこではコヨシキリがけたたましく鳴いていましたが、姿は雨のせいかなかなか見せてもらえませんでした。草原を進むうち、会員の指差す方にオリーブ茶褐色で白い眉班の上に黒い線のある姿を双眼鏡できっちりと捉える事が出来ました。恐らく一人でこの場所に来てもなかなかこうは簡単に姿を捉えることや名前を確認する事は大変であろうと思いました。

ＤＶＤやＣＤで姿や鳴き声を一応学ぶ事が出来たとしても、やはり実地の訓練が大切だという事が痛感され、実物の野鳥を見るたびに感激しております。

湖岸に出るとオオジシギ数羽が上空を飛んでいきました。湖岸に出ないで居残った方々は、ホウロクシギ、カワセミを見たという事で羨ましく思ったりもしました。帰る途中に自然観察グループと出会い、ミズナラの木に付いていたムシコブという小さい、りんごのようなものを見せていただき、それを半分に切ってみると幼虫がびっしり入っており、びっくりしました。大変貴重なはじめての経験でした。愛護会のホームページで探鳥地の記事を見て、色々期待もあったのですが、マキノセンニュウが５年前から見られなくなったという事を伺って、自然の変化が色々あるのだと、普段気にしないで生活している事を反省しました。

これからも、仕事の許す限り探鳥会に参加させていただきたいと存じますので、馬鹿な質問をしてもよろしくお相手、ご指導のほどお願いを申し上げます。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウヒ、コブハクチョウ、ホウロクシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、カワセミ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス　以上　31種

【参加者】赤沼礼子、蔵前　徹、後藤義民、坂井伍一・俊子、戸津髙保・以知子、中正憲佶・弘子、成澤里美、畑正輔、浜野チヱ子、濱野由美子、樋口孝城、真壁スズ子、松原寛直・敏子、吉中宏太郎・久子、鷲田善幸

以上20名

【担当幹事】鷲田善幸、樋口孝城

平和の滝

2008. 6. 1

滝川市　岩井　茂

ホームページで今回の企画を知り、私は遠足を楽しみに待つ子供のように高揚していた。しかも平和の滝のある札幌市西区は、私事ながらかつての勤務地で馴染み深い土地で、街並の変化を横目に会場へ向かった。

到着後初めてお会いする探鳥会の皆様に緊張しつつ、定刻出発した、当日の天気は日中雨だったが、夜にはすっかり上がった。雲の隙間から青空が見えてまだ暮れていなかった。道はぬかるんでいたが、平和の滝の豊かさや美しさは昔と変わっていなかった。

森を行く道すがら、翼の傷ついたハシボソガラスと遭遇したり、囀りを打ち消すようなエゾハルゼミの声を聴きつつ歩いていった。

そうすると徐々に鳥の声が聴こえるようになった。クロツグミ、キビタキ、オオルリ、キジバト、ヤブサメ‥‥。昼に見かける鳥が、夜も囀っている。不思議な気分だった。思ったより鳥の種類が多かった事も原因だ。メモをとる手が心なしか興奮していた。

だんだん夜の帷が降りてきて、滝や沢の瀬音を聴きながら、目的地の鉄塔のほとりにたどり着いた。声を潜めてしばし囀りを聴いていた。

すると方々からジュウイチの声が聴こえた。初めてジュウイチの声を聴き胸がおどった。

やがてウグイスやツツドリ等が鳴きはじめた。雲が厚くなり星は見えないが、月や雲の様子をながめていくうちに、アカハラやマミジロも後を追うように鳴いた。マミジロも初めて聴く鳥だ。珍しさに驚くばかりだ。

ツツドリに気を取られているうちに、かすかにコノハズクの声が聴こえた。かねてから聴きたかったコノハズクだ。夜の森を歩いてコノハズクを聴こうとしたが、全て空振りに終わってしまい、残念な思いがいつも胸をよぎった。今回の結果だけで結論を出すのは早いかもしれないが、コノハズクの住みやすい環境に戻りつつあるのではないだろうか。個体数も増えたのではなかろうか。

一行は滝を出て鳥合わせを行い解散した。意中の鳥の声は聴けなかったが、夜の森を舞台にした探鳥会に刺激が得られたのは、最大の収穫と言える。

夜の探鳥会の興奮のせいか、帰路は楽しく足取りがとても楽しかった。平和の滝の再訪だけでなく、街の変化に歳月を感じた一日だった。機会があれば、もう一度夜の探鳥会に参加してみたい。

【記録された鳥】ヤマシギ、キジバト、ジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、キセキレイ、ヒヨドリ、コルリ、マミジロ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、キビタキ、オオルリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上　17種

【参加者】岩井　茂、岩﨑孝博、高橋良直、戸津髙保、中正憲佶・弘子、蓮井　肇、樋口孝城・陽子、村木敬太郎

以上　10名

【担当幹事】岩﨑孝博、戸津髙保

東米里

2008. 6.15

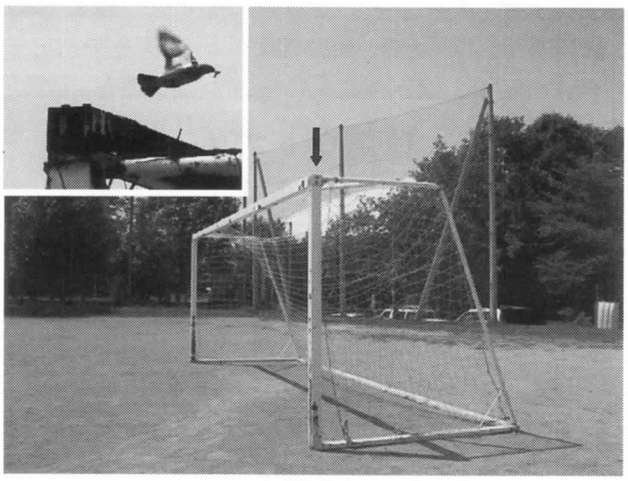
札幌市南区　品川　睦生

今回の東米里探鳥会感想文を依頼する担当になりながら肝心の書類を持ってくるのを集合地に着いてから思い出し今回の探鳥会の感想文を久しぶりに書くことになりました。

一寸朝は肌寒い天気ながら集合場所には多くの参加者が集まりました、また校庭のサッカーゴール枠パイプ内には今年もコムクドリが営巣していました、また学校前の電線にはカッコウが2羽止まり探鳥会参加者を迎えてくれました。

小さな草地にはノビタキが子育てを行っている模様で餌をくわえた親鳥を見ることが出来ました、またコムクドリがコンクリートの電柱の天辺から出入りしここでも子育てを行っている模様でした、ただ残念なのは草原がだんだん小さくなりまたプレハブの作業小屋が増加したようで草原の鳥が子育てや探鳥するのに環境としてだんだん悪くなりました、また例年見ることが出来たオオジシギのデスプレイ・フライトやアリスイが現れず残念でした。

今年の東米里は昨年に比べ草地が少なくなり鳥を見る環境としては悪くなり大変残念でした。



コムクドリ営巣のサッカーゴール

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ハチクマ、マガモ、キジ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、コヨシキリ、オオヨシキリ、メボソムシクイ、ホオアカ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、コム

クドリ、ムクドリ、ハシボソカラス、ハシブトカラス
以上　23種

【参加者】井上公雄、岩﨑孝博、今村三枝子、小西峰夫・芙美枝、小堀煌治、坂井伍一・俊子、品川睦生、高橋きよ子、高橋利道、田川　実・ひろ子、田辺　至、辻　方子、戸津髙保、中正憲佶・弘子、西　秀司、蓮井肇、畑　正輔、浜野チヱ子、濱野由美子、松原寛直、村木敬太郎、山田良造、吉中宏太郎、渡辺吉宗・好子　以上　29名

【担当幹事】品川睦生、戸津髙保

野幌森林公園

2008. 6.22

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、キジバト、アオバト、ツツドリ、カッコウ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス
以上　27種

【参加者】青山洋子、赤沼礼子、阿部真美、井上公雄、岩﨑孝博、今村三枝子、牛込直人、岡田弘毅、勝見真知子、菊谷勝男・靖子、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、坂井伍一・俊子、佐藤美榮子、品川睦生、高橋利道、田川　実・ひろ子、高柳里子、田中　洋・雅子、千葉久子、戸津髙保、成澤里美、畑　正輔、濱野由美子、原　美保、松原寛直、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子　以上　35名

【担当幹事】栗林宏三、松原寛直

福　移

2008. 7. 6

北広島市　大谷久仁子

7月6日、30度を越える猛暑の中、探鳥会が行なわれました。北海道野鳥愛護会の探鳥会には初めて参加させて頂きました。又、福移も初めての探鳥地です。集合場所に到着してまず驚いたのは、参加人数の多さでした。いつも地元の小さなサークルで、細々と活動している私には衝撃でした。

集合場所の周辺では、すでにコムクドリが可愛い姿を見せてくれていました。これから、どんな鳥が見られるのか、期待に胸膨らませて出発です。すぐにノビタキが現われました。この辺りにはノビタキがたくさんいました。続いてホオアカ。なかなか前へ進みません。

堤防に上がると、まっすぐな道が続いていました。この時期の草原は良いです。風は少々強めに吹いていましたが、この日の暑さにはありがたい風でした。石狩川から運ばれてくる、心地良い風に吹かれながら歩くのは、とても気持ちが良かったです。

少し歩くと、木の上に大きめの鳥影が見えました。双眼鏡を覗くと、なんとアオバトです！　すぐに前の方から「アオバトだよ～。」と伝令が飛びます。アオバト、綺麗でした！いつも声だけは聞いていましたが、姿を見たのは初めてです。感激でした！もうひとつ感激したのはシマセンニュウです。道端のすぐ脇の草叢から「チュルル、チュイチュイ」という美しい声が！シマセンニュウの声だと教えて頂きました。エゾセンニュウの声はよく聞きますが、シマセンニュウは初めて聞いたような気がします。覚えておいて、今度はフィールドで試したいと思います。

お墓の所ではホオアカが盛んに囀っていました。折り返し地点では、コムクドリ雄2羽とアリスイのスリー・ショットという珍しい光景が見られました。お墓に戻ってくると、まだホオアカがいました。「ホオアカのお墓参り」とか「○○家のホオアカ」とか会員の方達のジョークに大笑いです。次は合流点へ向かいます。

河岸ではカワセミが見られました。スコープの達人達が素早く捉えて見せてくれます。でも、カワセミがチョロチョロするので、スコープを覗くといない・・・。「入った」「いない」「飛んだ！」「どこどこ？」と会場騒然。それがとても楽しかったです。

帰り際、ノビタキの幼鳥を見る事ができました。あどけない表情や、クリクリしたお目々がとても可愛かったです。

残念ながら、今年は昨年より鳥の観察数が少なかったようですが、私には大変有意義な探鳥会でした。大好きなノビタキもたくさん見られて大満足でした。愛護会の皆さん、ありがとうございました。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウヒ、オオセグロカモメ、キジバト、アオバト、カッコウ、カワセミ、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノビタキ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス　以上　26種

【参加者】阿部真美、石川勝祥、板田孝弘、今村三枝子、岩﨑孝博、大谷光良・久仁子、尾島　輝、数田真弓・春菜、栗林宏三、小西峰夫・芙美枝、坂井伍一、佐藤優子、品川睦生、高橋きよ子、高橋良直、田川　実・ひろ子、竹田芳範、立田節子、田中　洋・雅子、田辺　至、辻　雅司・方子、戸津髙保・以知子、成澤里美、西　秀司、蓮井　肇・敏恵・かおり・茜、畑　正輔、浜野チヱ子、原　美保、早坂泰夫、樋口孝城、広木朋子、松原寛直・敏子、柳川　巌、山本和昭、吉中宏太郎　以上　46名

【担当幹事】岩﨑孝博、早坂泰夫

野幌森林公園
2008. 7.13

【記録された鳥】トビ、キジバト、アオバト、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ハシブトガラス　以上　25種

【参加者】今村美枝子、井上公雄、岩井　茂、苅部栄一、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、笹森繁明、四垂義治、品川睦生、清水朋子、白澤昌彦・瑠美子、辻　雅司・方子、徳田恵美、戸津髙保、富永、成澤里美、畑　正輔、原　美保、広木朋子、松原寛直・敏子、村木敬太郎、室野、山田良造、山本和昭、横山加奈子　以上　27名

【担当幹事】成澤里美、戸津髙保

探鳥会あんないだより

【石狩川河口】（再掲）
2008年９月28日(日)
前号(第152号)をご参照下さい。

【野幌森林公園】
2008年10月12日(日)、11月２日(日)、12月７日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥たちはほとんど渡去し、カラ類やキツツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。晩秋の頃から木々の葉も落ち、鳥は見やすくなります。木の実を食べるエゾリスの愛らしい姿も見られるかもしれません。大沢園地で昼食、午後１時半頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集　合：野幌森林公園大沢口　午前９時
交　通：新札幌駅ターミナル発
夕鉄バス（文京通西行）大沢口入り口下車
JRバス（文京台循環線）文京台南町下車
各徒歩5分

【宮島沼】　2008年10月５日(日)

宮島沼はマガンの秋の渡りの中継地として重要な場所です。例年９月下旬頃から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。春の渡り時期に比べて、宮島沼での滞在期間は短く、また群れも大きくはなりませんが、それでも２万羽から３万羽になります。マガンの他にも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。湖畔から沼を見るだけで、移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせをし、自由解散となります。天気が良ければ隣の駐車場横でお弁当を広げることもできます。

集　合：湖畔　午前10時
交　通：岩見沢駅前ターミナル発
又はJR石狩月形駅前発
中央バス（月形行又は岩見沢行）
大富農協前下車　徒歩10分

【ウトナイ湖】　2008年11月９日(日)

冬を間近にし、湖面にはこれから南へ向かったり、近郊で越冬するハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木にとまっているかもしれません。湖岸をサンクチュアリのセンターまで歩きます。途中の林では渡り途中の小鳥たちが見られることもあります。鳥の出具合にもよりますが、正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となります。センター内で持参の昼食をみんなでというのがいつものパターンです。

集　合：鳥獣保護センター前　午前９時30分
交　通：千歳空港発道南バス苫小牧行
ウトナイ湖下車　徒歩１分

鳥民だより

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。印刷予定数は**70部**で、価格は１部**1,200円**です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖探鳥会と、12月の野幌探鳥会になりますので、必ずお受け取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

申し込み先　**戸津**　８３１－８６３６（FAXも同じ）
小堀　５９１－２８３６（FAXも同じ）

【新しく会員になられた方々】
菊池　勝男・靖子（家族会員）　札幌市北区
大橋　　晃　　札幌市東区
佐藤　優子　　札幌市豊平区

会員増にご協力を!!

愛護会会員はここ数年ずっと減少傾向にあります。会員の皆様が一人でも多くの新しい会員をお誘いいただくことをお願い致します。

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　個人2,000円、家族3,000円（会計年度４月より）　郵便振替 02710－５－18287
〒060－0003　札幌市中央区北３条西11丁目加森ビル５・六階　北海道自然保護協会気付　☎（０１１）２５１－５４６５
HPのアドレス　http://homepage2. nifty. com/aigokai/